第二章　北方文化の展開

第一節　続縄文文化

第一項　採集と農耕

稲作農耕の始まり

縄文文化の終末期は、稲作農耕を特色とする弥生文化への転換期であった。近年この時期の様子がかなり詳しく知られるようになってきた。

弥生式土器が刷毛目のある平底の土器として、縄文式土器や古墳時代の土師器と区別されたのは一八九六年頃で、間もなく稲作農耕をしているようだということが予想されていたのだが、そう古いものとは思われず、当然鉄器を使用している時代のものと考えられていた（八木一九〇二）。ところが、東京大学の鳥居龍蔵が明治末頃から日本周辺の、当時の朝鮮、満州、蒙古、シベリアあたりの調査を始めたところ、それらの大陸地域の石器時代の土器が、日本の縄文土器とは違い弥生式と似ていることに気づいた。日本でも名古屋市の弥生式の遺跡では石器が伴うとの報告がなされていたことから、日本の石器時代に大陸から渡来した弥生式土器使用者のいたことと、それが日本人の祖先と考えられ、アイヌの祖先の使用した縄文土器の文化と同時併存していたのではないかという学説を発表した（鳥居一九一六）。縄文土器をアイヌ式土器というようになったのはこの学説による。この学説が出た頃まで、実は縄文土器という言葉は一般的ではなく、石器時代土器とか貝塚土器というのが普通であった。

この鳥居説に対して、京都大学の浜田耕作は石器時代の土器に二者の区別のあることを認めたうえで、土器と人種や民族を結びつけるような命名はどうかという観点から、それまで通常の用法ではなかった縄文土器あるいは縄文式土器という名称を弥生式に対して公式に使用することとし、使用民族については結論を急がず、今後の研究課題としてはどうかという立場から論説を発表した。東北大学の松本彦七郎は東日本ではアイヌ式、西日本では弥生式というような地域を異にした同時併存ではなく、北海道にも弥生式に類する土器があるので、この両者は前後の関係であり、アイヌ式が古く弥生式が新しいのではないかという説を述べた。弥生式のうち刷毛目のある多くのものは新しく、弥生式の古いものには縄文や沈線文が認められるのではないかという土器の観察をもとにしていた（松本一九一八）。

一九一八年の松本説の発表前後のことであるが、富山県氷見市の大境洞窟から人骨が発見され、その洞窟の発掘調査が行われた。その結果、最下層に縄文式があり、その上の層に松本のいう古い時期の弥生式があり、さらにその上層から新しい時期の弥生式、さらにその上層から古墳時代の土器が発掘された。その調査には東北大学の長谷部言人もかかわっていて落盤で区分された各層の記録を発表している。これは松本説を実証するものと受け止められ、縄文式時代と弥生式時代の前後関係が定まったのであった。

九州で調査を続けていた九州大学の中山平次郎は弥生式に青銅器の鉾や剣、漢代の銅鏡、あるいは貨泉という中国の貨幣が伴い、また米も存在すると考えられるという調査結果を発表していた。京大の浜田耕作・梅原末治は朝鮮の金海貝塚を一九二〇年に発掘して鉄器と貨泉と米が弥生式のような土器と共に出土したことから、中山の言うように弥生式の時代は金石併用期で稲作を行っていたと考えられることを一九二二・一九二三年に報告している（浜田他一九二三・梅原一九二二）。弥生式に伴う石包丁という石器が、穀類の穂摘具と考えられることを中国で調査していたアンダーソン

が発表したのは一九二三年であった。

水田による稲作農耕が弥生文化の特色であることは、その後の調査でますます強調されるようになった。戦後の大規模な登呂遺跡の発掘は当時の住居の跡や矢板で構築された水田の跡を生々しく明らかにした。考古学者の日本最大の団体である日本考古学協会が、この登呂遺跡の調査を契機に結成され、組織的に弥生時代の遺跡調査が実施されることとなったのだが、一九五一年から一九五八年までの調査結果が一九六一年に報告された（協会一九六一）。その板付遺跡の項によると、従来弥生式の最初頭と考えられていた遠賀川式土器類が層位的に出土し、最下層の弥生式土器が最末期の夜臼式という縄文土器と共存していることが明らかにされた。夜臼式と共存する弥生式を板付Ⅰ式、従来の遠賀川式を板付Ⅱ式と名付けている。一九七八年の板付遺跡の調査で、板付Ⅰ式と夜臼式共存時期の水田遺構が上層で確認され、中層の夜臼式的な土器の層を挟み、その下層から縄文晩期突帯文土器の時期の水田遺構と木製農耕具・石包丁などが発掘された（山崎他一九七九）。下層の土器を夜臼Ⅰ式その上層の土器を夜臼Ⅱ式とし、その中層から出土しやや古いとみなされるものをⅡａ式、上層のものをⅡｂ式と名付けている（山崎一九八〇）。

一九八一年には夜臼式と共存しない板付Ⅰ式が今川遺跡で報告された（伊崎一九八一）。今日では、従来の板付Ⅰ式をⅠａ式とし、今川遺跡のような土器を板付Ⅰｂ式として区別し、この時期から弥生前期と呼ぶことがおこなわれている（家根一九九三）。

一九八二年には唐津市菜畑遺跡で夜臼式以前の山の寺式期の水田遺構が報告され（中島他一九八二）、今日まで最古の水田跡となっている。この弥生前期に先立つ水田のある北部九州地域の縄文晩期後半の時期について、弥生早期とも称している。

続縄文文化と弥生文化

一方青森県では、一九八一年に田舎館村垂柳遺跡で広大な水田跡が発見された。それまで、青森県のこの時期の遺跡については伊東信雄を始めとして長年に亘る調査がなされてきたが、なかなか弥生式と認められなかった。伊東は学生の頃長谷部言人から、籾痕の付いた桝形囲遺跡の土器の底部を見せられ、遺跡・遺物によって歴史を明らかにする考古学の魅力にとりつかれたのであったが、仙台の第二高等学校所蔵の青森県田舎館村出土の壺をみて、それが弥生式であろうと思ったのがその第一歩であった（伊東一九七九・一九八五）。壺には幾何学的沈線文が施されていたけれども縄文があり、山内をはじめ誰も弥生式とは言わなかった。弥生時代に相当する時期の土器で、縄文があり、弥生式とは言い難い土器を続縄文式と称したのは山内であった。一九二六年に室蘭市本輪西貝塚の亀ヶ岡式の出土層より上の貝層から発掘した土器に田舎館の土器が似ていることから、田舎館の土器を続縄文式の本州での例としていた（山内一九三九）。

伊東は一九五七年に田舎館村垂柳遺跡を発掘し、田舎館式土器と共存する二〇〇粒の焼米を得て、弥生式と認められることを期待して学会に発表したが、水田がないことから米だけ伝えられたのであろうと言われ、なお弥生式とは認められなかった。伊東は青森に米が伝わるなら、北海道にも伝えられ、北海道から米が発見されてもよいはずだが、北海道で発見されないのは青森まで稲作が行なわれていたからではないかと述べていた（伊東一九七九）が、考古学では、ないということは積極的な証拠とは考えられないのであった。伊東の弥生文化説とその他の研究者の続縄文文化説との長年の対立状態に決着をつけたのが、一九八一年の水田の発見であった。その後一九八七年に弘前市砂沢遺跡で弥生前期の水田跡が発見された。この発見は続縄文文化の範囲が北海道内に限られ、縄文時代晩期の亀

ヶ岡文化の範囲が、そのまま弥生文化へ移行したことを示すものであった。

一九五九年に坪井清足は「北海道では縄文式時代が終了しても、本州のように弥生式文化が直接波及せず、ながく縄文式時代の生活様式がたもたれていたため、本州とは異なり、縄文式土器の伝統を保持した土器型式がつづくことになった。これを順にいえば、縄文晩期につぐものは、続縄文式土器であり、さらに擦文土器、それから分布圏をやや異にするオホーツク式土器に三大別することができる」。「続縄文式土器。前半は南部で恵山式とよばれ、東北地方北部の田舎館式と類似したものである。壺や深鉢の頸部に刻線文や磨消縄文ふうの文様があり、胴部に特色ある縦走の縄文がみられる土器で、室蘭市元（ママ）輪西貝塚上層によって、その編年的位置が決定された。後半は深鉢には細い隆起線のある土器を特徴とする後北式で、全道に分布し、無文の土器も多く、そのなかに壺形土器もみられる。東北地方の田舎館式を弥生式土器であるとすれば、恵山式も弥生式土器であろう。すくなくとも東北地方の弥生式文化の影響を受けたものであることはうたがいない」と述べていた。

これに対して、伊東は一九七八年の講演で「本輪西貝塚上層出土の土器は田舎館遺跡出土の土器の古い方の型式に相当するものであり、今日北海道で恵山式と呼ばれているものの仲間であります。青森県の田舎館式と北海道の恵山式とはきわめてよく似ていて、同時期に行なわれたものであることは事実であります。同じような土器を一方では弥生式といい、他方では続縄文式と呼ぶのはおかしいのではないかという意見もありますが、田舎館式には稲作を伴っているが、恵山式には伴わないばかりでなく、魚形石器、骨角製の銛、釣針などの存在から見て狩猟、漁労を主とする生活をしていたことが明らかであって、稲作農耕をしていた田舎館式とは生活の基盤がちがっている。したがって田舎館式は弥生式と見るべきであるが、恵山式は続縄文式としてこれと区別すべきものとわたしは思うのであります」と述べた（伊東一九七九）。この伊東の考えは、今日では田舎館式以前の二枚橋式や砂沢式についても同様にあてはまる。

九州では縄文時代晩期の大洞Ｃ２式後半頃に佐賀県松浦平野に水田農耕を営む村が出現した。弥生早期と称しているが、朝鮮半島系の土器などが発見されていて、渡来人が住んだ村から弥生文化がはじまり、やがて福岡平野にもおよび（片岡二〇〇六）、板付Ⅰｂ式の時期に瀬戸内地域にひろまり、板付Ⅱ式の初めには畿内から伊勢湾沿岸地域にまで拡大し、畿内第一様式と呼ばれる土器群が形成される。この土器群は古中新の三段階に区分されていて、福島県では中段階、青森県には新段階相当の土器が認められるといわれる。これまでを弥生前期とし、その後の畿内第二様式から第四様式土器の時期を弥生中期、その後の第五様式の時期を弥生後期としている（武末・石川編二〇〇三）。青森県では、砂沢式が前期、二枚橋式、宇鉄Ⅱ式と田舎館式、念仏間式がそれぞれ第二、第三、第四様式相当で中期、その後の天王山式系のものなどが後期と考えられる。

鉄器の普及

鉄器が青銅器と共に弥生文化に出現するのは、前期の末から中期の初めころである。北部九州地域の朝鮮半島からの渡来人の村では金属器の加工もしていたようである。東北地方では弥生中期までは水田稲作が順調であったかのごとく遺跡が多く発見されているが、後期の遺跡はあまり知られず、水田の遺構も青森県では明らかではない。気候が悪化したことによるらしいが、この弥生文化の後期には鉄器が広く普及し、北海道にも伝わったと考えられる。東北地方では人口が減少したらしく、北海道系の後北式土器などが南下し、青森県や新潟県などにも認められるようになる。人の

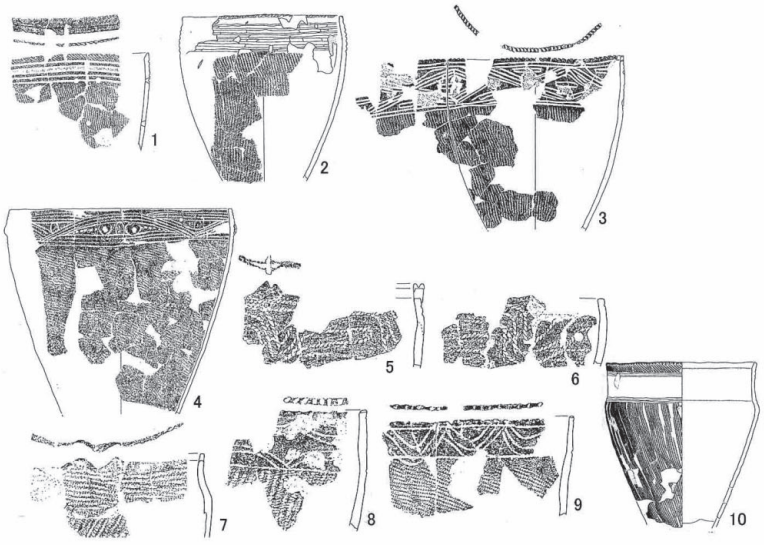
行き来があったことから、金属器も北海道へもたらされることになったのであろう。この傾向は三、四世紀にも引き続き、北海道系の土器の存在する地域は青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島、新潟の各県に及んでいる。西日本に古墳文化が出現するのは三世紀頃であり、四世紀頃には東北地方南部におよぶ。その過程で、東北地域の弥生系の人々が古墳文化に同化するか、北海道へ逃れるかという選択を余儀なくされたのかもしれない。古墳文化がさらに東北地方北部に影響を及ぼすのは五世紀から六世紀のことであり、北海道の続縄文文化は六世紀に終末を迎えることとなる。

続縄文文化の展開

続縄文文化について山内は「続縄文式期」は二期に分かれ、第一期は内地の弥生式と並行し、第二期は古墳時代に相当すると一九六九年に述べていた（山内一九六九）。北海道の続縄文文化の土器は、千島やサハリンのものとは少し違っていて、古くから北海道式といわれてきた。北海道式は前期と後期の二者に区分され、前期北海道式を前北式、後期北海道式を後北式と略称している。一九六一年に新冠町大狩部遺跡の調査報告がなされた際、前北式の続縄文文化初頭頃の土器に、大狩部式という名が与えられた。その六号と名付けられた墓から、約四〇〇個の琥珀製の玉が発見され、それを一連とすると、一・六メートルとなるという。それらに伴うとみなされる土器・石器類を特徴として大狩部文化とも称されている（藤本一九六一）。

大狩部遺跡では砂沢式相当とみなされるものをA類に含めて報告され、B・C類の縄線文と縄文を施す大狩部式との関係は今後の課題として保留していた。このうち完形土器第一号は砂沢式の時期と見ることもできそうであり、将来的には砂沢式相当期の大狩部式古段階とその後の二枚橋期相当の大狩部新段階を設けてもよいように思われる。現在大狩部式は二枚橋期相当として使用されることが多いけれども、砂沢式から二枚橋期にわたるような土器群であり、類似の土器は道南から道東まで広く認められている。

現在恵山式と称されている土器は、本来室蘭市本輪西貝塚上層で山内により注意されたものであった。山内の主催していた先史考古学会の会員であった能戸川隆・名取武光が調査報告した恵山貝塚の資料により、恵山式と称されるようになり、この土器の名称は峰山巌が一九五二年に名取の教示により記載している（峰山一九五二）。この土器の類は、道央部では前北式の大狩部式の後の時期に相当するものが多い。後北式はA、B、C、D



〔１～３：砂沢式相当、４～10：大狩部式相当〕

（出典）１～９：市教委『梅川４遺跡における考古学的調査』2002
10：道埋文『美沢川流域の遺跡群ＩＸ』北埋調報44　1987

図２－１　続縄文時代の土器(1)
砂沢式と大狩部式

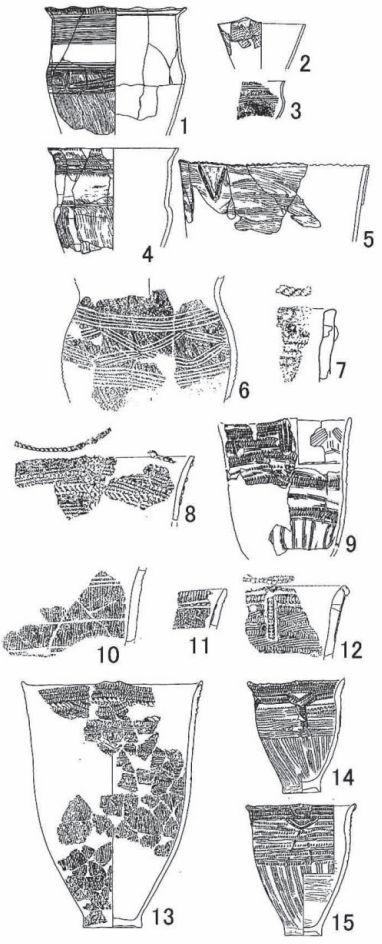
式と区分されたが、その後種々変更され、現在Ａ、Ｂ、Ｃ１、Ｃ２・Ｄ、北大式の区分がなされている。これらの変遷序列は、一九五一年から発掘調査されたフゴッペ洞窟の資料により後北Ｂ式から北大式までが決定し（名取一九五四）、一九七八年に調査された江別太遺跡の調査により、それ以前の序列がほぼ確定した（高橋他一九七九）。なお砂沢式相当期の良好な資料が札幌市Ｈ37丘珠空港地点の調査により一九九四年に得られた（札幌市教委一九九六）。

千歳市内の砂沢式から二枚橋期の大狩部式に相当する資料は（図２－１）、梅川４遺跡（市教委二〇〇二）とキウス５遺跡（北埋調報一九九六）、ふ化場１遺跡（市教委一九七九）等に認められる。青森県の砂沢式には縦行縄文の施されたものが多く、札幌市Ｈ37遺跡でも千歳市梅川４遺跡にも多く認められるが、北海道南西部の太平洋沿岸には頚部に無文帯のある土器で、口縁部に斜行縄文、体部に縦行縄文を施す恵山式に通じる施文の認められるものがあり、原恵山式の類と考えられる。梅川４遺跡にも認められる（図２－１－１）が、大狩部式の中に砂沢式の要素が取り込まれて恵山式の類が形成されていく過程が知られるようである。梅川４遺跡の砂沢式段階の資料はキウス５遺跡の例とも近く、札幌市の例とは少し異なり、太平洋沿岸グループの大狩部式的である。

二枚橋段階の資料には縄線文や帯状縄文が出現し、大狩部式や古段階の恵山式（図２－１－10）が道内で広まると考えられる。市内のこの頃の資料は美々２遺跡（北埋調報一九八六）、美々８遺跡（北埋調報一九八九）、ふ化場１遺跡、キウス５遺跡、梅川４遺跡等に認められる。恵山式は渡島半島から噴火湾沿岸地域に主として分布する。道央部にはこの時期から、上半部に横走する縄文、下半部に縦行縄文を施す大狩部式からその後の東歌別式の類が定着するけれども、その過程を示すような資料が梅川４遺跡に認められる。なお、この時期ころから体部に撚り糸文を施すものが伴うらしく、キウス５遺跡に例がある。

この次の時期は軽川式、東歌別式古段階のものであるが、江別市江別太遺跡Ⅲ六層のような恵山式前期段階のものも相当する（図２－２）。この頃の恵山式の類はウサクマイＣ遺跡のＢＨ－一・二などでまとまって出土している（図２－２－１・４、市教委一九七九）。なお梅川４遺跡にも、横走する縄文の付けられた口縁部の内面から刺突し、器面に突瘤文を形成する、東歌別式の古段階と見なされるものや前期段階の恵山式が認められる（図２－２－７）。

江別太遺跡Ⅲ五層に相当する時期と考えられるものとしては、梅川４遺跡出土の軽川式の類がある。青森県の田舎館式以降に見られるような鋸歯状の沈線文が施されている。また縄線文と刺突文のある軽川式の類も認め



〔１～７：恵山式、軽川式、東歌別式相当
８～１：後北Ａ・Ｂ式〕

（出典）１～５：市教委『ウサクマイ遺跡とその周辺の考古学的調査』1979、
６・７・13：市教委『梅川４遺跡における考古学的調査』2002、
８・９・14・15：道埋文『千歳市オサツ２遺跡(1)・オサツ14遺跡』北埋調報96 1994、
10～12：『千歳市ママチ遺跡Ⅲ』北埋調報36　1986

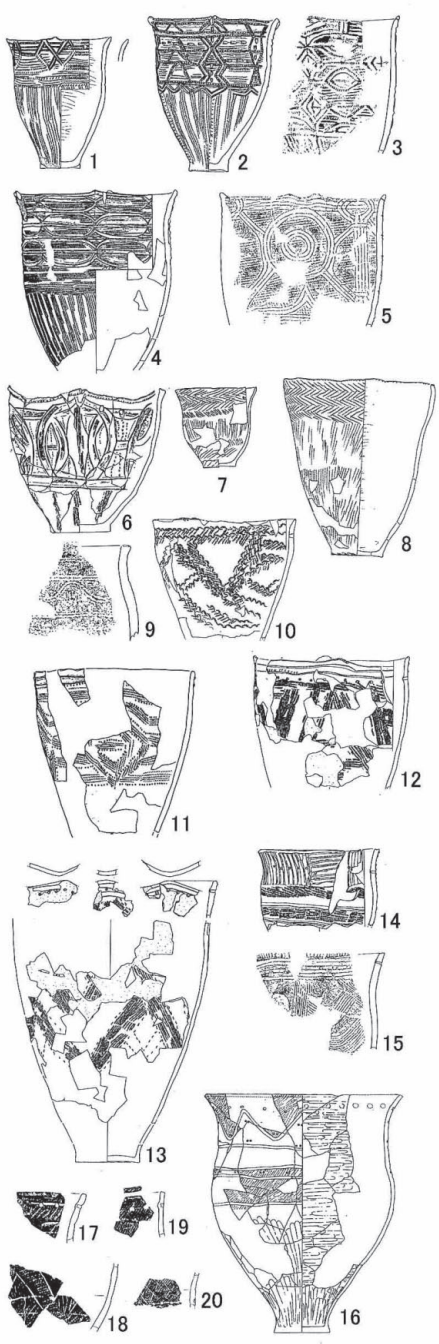
図２－２　続縄文時代の土器(2)

られる。ウサクマイＣ遺跡にはこの時期に相当しそうな資料もある。

後北Ａ式に相当するものは、ウサクマイＪ、オサツ２遺跡等で出土している。江別太遺跡ではⅢ四層、Ⅲ三層、Ⅲ二層から後北Ａ式が出土していて、微妙な差が認められるようである。それと比較すると、ウサクマイＪとオサツ２遺跡の資料はⅢ四層、オサツ２遺跡Ｐ－五の資料はⅢ三層あたりに相当するかと見られる。なお梅川４遺跡出土の資料は、Ⅲ二層の後北Ａ式とＢ式との間に置かれるように思われる。同様な資料は、ママチ遺跡でも出土していた（北埋調報一九八二）。なおママチ遺跡でこの種の最末期の後北Ａ式に伴うかと見られる恵山式系統の資料がある（図２－２－10）。

後北Ｂ式の類は、江別太Ⅲ二層のものに相当するような最古段階のものはオサツ２遺跡ＧＰ－５・６・８（北埋調報一九九五）にあり、似たものはユカンボシＣ15遺跡にも認められる。一般的なものは、オサツ２遺跡ＧＰ－１・２・３のものである。美々２遺跡にはより新しい、文様が弧線化したものが認められる（図２－３）。続縄文文化前期の装身具は琥珀製のものが多いのであるが、道南から道央にかけて弥生中期から後期に相当する時期に、緑色の管玉等の本州製品が渡来している。江別市元江別遺跡では軽川・恵山期のものがあり、千歳市オサツ２遺跡では後北Ｂ式の墓に管玉が認められている（図２－４）。このころの北海道系の土器が富山県福岡町下老子笹川遺跡で出土している（富山埋文二〇〇六）。帯状縄文の付けられた恵山式の流れをくむものとみなされる。本州の日本海側北部でも似た例が発見されていて、この時期に北海道から積極的に本州側へ人々が渡っていたことも考えられることとなる。

後北Ｃ１式の類は美々２遺跡に認められる。この時期のより新しい段階



１～３：後北Ｂ式、４～５：後北Ｃ$_1$式
６～12：後北Ｃ$_2$・Ｄ式と本州系、サハリン系の土器
13～15：北大Ⅰ、16～20北大Ⅱ

（出典）１・２：道埋文『オサツ２遺跡、オサツ16遺跡』北埋調報96　1995、３・４：道埋文『美々２・美沢川流域の遺跡群(9)』1985、５：市教委『梅川４』2002、６：『末広（下）』1982、９・10：『末広４』1996、７・８・11：『千歳市キウス７遺跡(3)』北埋調報105　1995、12～14：市教委『祝梅川山田』1991、15：『ウサクマイＣ』1979、16：『孵化場１』1979、17～20：道埋文『ウサクマイＮ遺跡』北埋調報156　2000

図２－３　続縄文時代の土器(3)

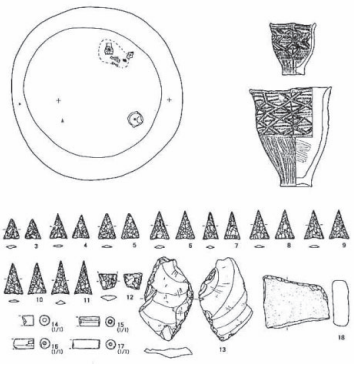


図２－４　後北Ｂ式期の土墳墓と副葬品（オサツ２遺跡 GP－１）

とみなされるものは梅川４遺跡にある（図２－３）。この時期は本州では弥生文化の終末の頃となる。新潟県西山町内越遺跡で畿内第Ⅴ様式とされる時期の住居跡から後北Ｃ１式の新しい段階のものが出土している（新潟県教委一九八三）。その後、この時期の資料は同県中条町でも出土した（中条町教委一九九八）。道内のこの時期の墓から本州製のガラス玉が出土する。十勝太若月遺跡や国後の遺跡にも認められ、本州製品の流通網が形成されていたかのようである。道南から道東、道北、さらに千島にかけて後北Ｃ１式の分布が認められるようになる。それまでの道南の恵山式、道東の宇津内式、下田ノ沢式等の領域、あるいは人々を統合したかの感がある。本州製品の価値を高く認めるような、価値観の転換が生じていたかのようである。

続縄文文化の縮小

後北Ｃ２・Ｄ式はその時期が本州の古墳時代前期に相当するもので、本州でも東北地方に広く出土例が知られている。前半期のものには縦横の基準線を設け弧状や円形に帯状縄文を施し、整った文様を形成する。この種のものは市内では末広遺跡をはじめ多くの遺跡にみとめられる。後半期には直線的な帯状縄文で鋸歯状の文様を施し、末期のものでは、口縁に沿って円形の刺突文を巡らせ、内面に突瘤をつくるものがみられる。これらはキウス７遺跡や祝梅川山田遺跡等に認められる。末広遺跡やキウス５遺跡では前半期のものに伴うと考えられる本州の終末期の弥生式の系譜を引く土器が出土している。また、末広遺跡にはサハリン系続縄文土器の鈴谷式と関連するとみなされる土器が出土した（図２－３－９）。

鈴谷式は樺太式縄文土器とも呼ばれ北海道式とは区別されてきた。これらはそれぞれの地域から渡来した人々がこの地に居住し、在地化したことを示すのかも知れない。サハリンの鈴谷貝塚から後北式土器も発見されている。これらの交流が活発になされたのは前半期のほぼ三世紀頃のことであったようである。この前半期の土器が秋田県寒川２遺跡で墓から出土している（秋田県教委一九八八）。そこには弥生式の系譜を引く土器の入れられた墓もあり、鉄の斧も認められた。同様な墓は岩手県盛岡市の永福寺山遺跡でも知られ、そこでは弥生系の土器と西日本の庄内式土器等も出土している（伊東一九七四）。庄内式は丸底の土師器で弥生式の直後、古墳文化初頭の土器である。この後北Ｃ２・Ｄ式前半期には東北地方に北海道系の文化になじむ人々が広い範囲に居住していて、西日本から北上してきた古墳文化の最前線の人々と接触していたことが知られ、鉄製品等を入手し北海道へ搬送していたことが考えられるのである。北海道ではこの時期から石器の量が少なくなっている。時代が変わってきていることを示すようである。これらを主導したのは東北の弥生系の人々であったかも知れない。

後北Ｃ２・Ｄ式後半の時期には、新潟県巻町南赤坂遺跡で後北式と、土師器と、その中間の、形は土師器であるが後北式の縄文を施すような土器が発見されている（巻町教委二〇〇二）。その地に居住した後北式使用者が古墳文化になじみ、土師器使用者に転換していった姿を示すもののようである。北海道へは鉄製品の搬入がなされたものであろうが、それと共に漆塗りの櫛やガラス玉等がもたらされ、網走市内の墓から発見されている（畠山一九六六）。また東北地方で作られた土師器も道南の七飯町桜町遺跡で出土している（七飯町教委二〇〇〇）。この四世頃には、宮城県あたりにまで古墳が形成されている。宮城県北部の伊治城跡で四世頃の豪族居館跡とみなされる遺跡が発見され、そこから後北Ｃ２・Ｄ式末頃の内面に突瘤のある土器などが初期の土師器に混じって出土している（築館町教委一九九二）。北海道の北部では、礼文島の香深井Ｂ遺跡（大場・大井一九八一）や稚内市のオンコロマナイ遺跡（東大一九六七）で、サハリン系の土器を伴う住居

跡が発見されている。サハリンから南下した人々が、在地化せずに村を形成していたかのようである。

北大Ⅰ式土器は市内ではユカンボシC15遺跡、ウサクマイC・N遺跡、祝梅川山田遺跡等に見られ、古段階のものも認められる。五世紀代のものである。東北地方では宮城県北部、山形県、秋田県等でも出土し、それらには刷毛目調整を伴う土師器化したものもあり、古墳文化へ編入されていく様子がうかがわれる。青森県森が沢遺跡にはこの時期の墓が発見されていて、鉄器やガラス玉、土師器、須恵器等を伴うものであった（国立歴博一九九四）。同様の土師器や須恵器は、道南から道央にも及んでいて、北海道の南部からは古墳文化の影響が浸透していた様子が知られる。北海道東北部では常呂川口遺跡で、このころのサハリン系の鈴谷式土器が発見されている（常呂町教委二〇〇二）。

北大Ⅱ式土器は、磨消縄文風の文様のある古段階のものがふ化場１遺跡やウサクマイN遺跡に認められ、縄文地に沈線を施文する末期のものが末広遺跡等にある。六世紀前半から中葉とみなされるが、土師器風の土器もあり、本州から北海道へ、特に道南へ渡り居住する人々もいたことと思われる。道北では礼文島香深井５遺跡やオンコロマナイ貝塚など、鈴谷式の末期頃の集落が定着していたようである。

北海道の縄文のある土器は北大Ⅱ式を最後として消滅する。続縄文文化は南と北からの文化の影響により南北の二つの文化に分裂して終焉を迎えることとなる。